

# 「にーが」構文に関する一考察

## － 研究史からの示唆 －

趙 蓉

### 1. はじめに

日本語の文構造「にーが」構文は以下の(1)～(5)<sup>1</sup>で示されるように、典型的存在文、自発文、可能文など様々な意味構造に使われる。なぜ、「にーが」構文は、このような多様な意味構造を持ちえるのかということについて、国語学と生成文法の成果を参照しながら、主に認知言語学の立場から、その内部関連性、文頭の二格と後続部分との関係について明らかにする必要があると考える。

- (1) 机の上に花瓶がある。(典型的存在文)
- (2) 代助に(は)この社会が全然暗黒に見えた。(自発文)
- (3) 私に(は)彼が親切すぎる。(主観的判断文)
- (4) 私に(は)彼が来るのがうれしい。(感情文)
- (5) 私に(は)彼の汚い字が読めた。(可能文)

「にーが」構文については、立場と具体的な研究範囲が異なるものの、国語学、生成文法及び認知言語学で広く研究されている。本研究では、まず、以上の三つの学派における「にーが」についての代表的学説を紹介し、次に、そこから得られた示唆や問題点をそれぞれまとめ、最後に今後の課題を述べる。

### 2. 国語学

従来の国語学の研究では、「にーが」構文そのものを研究対象にするものは少ないが、それに関連するものは多い。特に、益岡(2000)はその代表的一説であると言える。本章では、益岡説の特徴をまとめて、そこから得られた示唆とその問題点を述べる。

益岡(2000)は、補足語における格と意味役割の関係との角度から、「二格+ガ格+述語(動詞)」という格配列の構文を取り上げている。この構文に現れる動詞には、次のようなものがある。

- ① 存在・所有を表す「いる、ある」
- ② 能力を表す「できる」
- ③ 感覚・知覚を表す「見える、聞こえる、分かる」
- ④ 必要性を表す「要る」

(益岡 2000 : 237～242)

益岡説では、この「二格+ガ格+述語(動詞)」という構文に、次のような特徴があるとしている。

- ① 文頭の二格は位置を表す。
- ② 動詞は状態か、自然発生的な出来事を表す非対格自動詞である。すなわち、「ある、いる」、「要る」などは状態を表し、または、「現れる、生まれる、できる」などは自然発生的な出来事を表す。
- ③ ガ格を対象語として扱う。

益岡氏は綿密な記述により、「にーが」動詞文が「状態か自然発生的であるか」のイメージを描いた。これは「にーが」構文の意味的位置づけを提示したものである。しかし、益岡説には、次のような問題点が指摘できる。

1) それぞれの意味構造について記述しただけに終わっており、深い理由を問わなかった点は不十分であると思われる。

2) 益岡説は「にーが」動詞文を主に動詞意味論の角度から研究したため、未解決の問題が残った。たとえば次の例(6)(7)のように、動詞が同じで、格形式も同じであるが、文全体の意味が異なったりすることがある。

(6) 机の上に花瓶がある。(存在文)

(7) 花瓶は机の上にある。(所在文)

「ある」という動詞には存在するものと存在する場所が必要である。この点については、上の二つの例文は一致している。だが、尾上(近刊)が主張しているように、「机の上に花瓶がある」は存在を述べる文であり、「花瓶は机の上にある」というのは花瓶の所在を述べる文である。即ち、例(6)と例(7)は種類の違う文で、分けて処理したほうがいい。この点については、「場一参与者」構文の理論から説明が可能だと考える。

3) 特徴の①と③についても検討すべきであると考ええる。具体的内容は4章で議論する。

### 3. 生成文法

生成文法では、「にーが」構文は非規範的構文の一部として扱われていて、それについては他動詞構文論と二重主語構文論がある。以下では、この二つの説について述べる。

#### 3.1 他動詞構文論

久野(1973)、柴谷(1978)、岸本(2005)などでは、以下の例(8)と例(9)のような「主格一対格一他動

詞」(ガ格+ヲ格+他動詞)、「主格ー自動詞」(ガ格+自動詞)の格標示パターンに従う構文を規範的構文とする。それに対して、例(10)と例(11)のような「主格ー主格」(ガ格+ガ格)、「与格ー主格」(ニ格+ガ格)の格標示パターンに従う構文を非規範的構文と呼ぶ。以上の研究は、非規範的構文は述語が他動詞の状態述語であり、文としては他動詞文であると主張している。

- (8) 太郎**が**次郎**を**殴った。
- (9) 太郎**が**走った。
- (10) 太郎**が**花子**が**好きな(こと)。
- (11) 太郎**に**お金**が**必要な(こと)。

### 3.2 二重主語構文論

柴谷(1978)では、非規範的構文は他動詞文であると主張したが、柴谷(2001)では、「非規範的構文を形成する述語は基本的には自動詞であって、主ー述関係は、第二番目の名詞句と述語の間で結ばれていると考えるべき根拠がある」として、非規範的構文は二重主語構文であると主張するようになった。これは、尾上の二重主語文と熊代の分裂主語構文と一致する部分が多く、三つの学派的観点が見寄ってきたと言える。即ち、「にーが」構文が他動詞構文でないことはほぼ定説になったと言えよう。

柴谷(2001)は「にーが」構文の研究において、項構造研究の必要性を提示している。項構造とは、「構文を形成する名詞句のうち、どれが必須のものであるのか、またそれらが文法関係とどのような対応を示しているかを表す理論的構築物」(柴谷 2001: 37)である。この視点は「にーが」構文の研究に欠くことのできない点である。即ち、「場」であるニ格は必須成分か、それとも単なる修飾成分か、ということについて詳しく検討する必要がある。この点は熊代説で紹介する「場」の機能と繋がっている。

「にーが」構文のニ格が状況語か、主語かという問題は長年論争が続いており、特に久野(1973)をはじめとする統語論からのニ格主語説は有力である。一方、青木(1992)はニ格を状況語とし、尾上(近刊)は存在文のニ格は必須成分であるとしているが、主語とはしない。

日本語は格標示で示されているので、意味役割は分かりやすい。ただし、格標示だけでは、文における各成分の機能的役割は判断しにくい。生成文法では、「山田さんに(は)子供がいる」のような、ニ格を取り除くと省略文になる文を取り上げて、その文におけるニ格が必須度が高くて、主語であるとする。しかし、省略文であるかどうかという判断それ自体が難しい。この点は今後の研究の重要な課題でもあり、検討されるべき

点でもある。

## 4. 認知言語学

本章では、ラネカーの「場ー参与者」理論とそれを日本語に応用した熊代説を紹介し、その説の問題点を指摘する。それから、家族的類似性原理の導入によって、本研究の立場を述べる。

### 4.1 ラネカーの「場ー参与者」理論

Langacker (1991) では、人間の認知活動の一樣相を理想化したものにステージ・モデルがあると主張した。このモデルでは、人間が自分から離れた外部の領域に意識を向け、その領域内の事物に注意を払う。さらに、ステージに相当するさまざまな事物が存在する変化しない外部領域は「場」として捉えられ、その「場」において動き回り、互いに関わり合うサイズの小さいモノは「参与者」である。

さらに、「場」は副詞的要素として機能することもあれば、文の主語として機能することも可能である。

- (12) Last night in front of his apartment, Josh witnessed a tragic car accident.

- (13) November witnessed a series of surprising events.

以上の例では、時間フレーズ Last night と空間フレーズ in front of his apartment は文の状況語として副詞的役割を果たしているのに対して、November は文の主語として機能している。この点は生成文法の項構造理論と繋がっており、3章で述べたように、「にーが」構文の研究において欠くことのできない視点である。

### 4.2 熊代の「にーが」構文

熊代(2002)はその「場ー参与者」の概念を日本語に応用し、「にーが」構文という概念を提出した。また、「にーが」構文を以下の3種類に分けて述べた。

#### ① 参与者主語構文

参与者主語構文は参与者が主語で、場が状況語である文。参与者主語構文には存在文、適用文がある。

- (14) 研究室の前に先生がいる(こと)。

#### ② 場主語構文

場主語構文は名前で示す場が主語である文。場主語構文には、所有文、評価文、可能文がある。

- (15) 健にフランス語ができる(こと)。

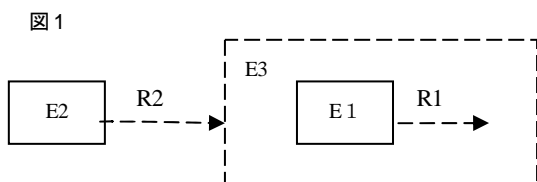
#### ③ 分裂主語構文

分裂主語構文は主語が場と参与者に分裂して、存在する文である。これは二重主語構文とも呼ばれている。分裂主語構文には主観的判断文と「いる」所有文がある。

- (16) 健にこのコンピューターが一番いいらしい(こと)。

詳細な説明は熊代（2002）を参照されたい。

熊代説では、日本語には次のような特徴があるとされる。次の図（1）で示すように、一つの事物（E1）が、ある関係（R1）に参加し、上位レベルにおいて、新たな事物（E3）として認識される。さらに、他の事物（E2）がこの上位的事物に参加して、新しい関係（R2）が認められる。



（熊代 2002 より引用）

例えば、「太郎にフランスができる」の場合はフランス（E1）という事物ができるという関係（R1）に参加し、この二つの複合体が上位レベルにおいて、新たな事物（E3）として認識される。さらに上位的事物「太郎」（E2）との間に更なる関係が認められる。

上述した熊代説には以下の二つの問題点が指摘できる。

1) 「場」とは何か。

「にーが」構文は「場－参与者」構文であるとされるが、このいわゆる「場」とは何か。例（17）のように、文頭に立つデ格は、場所を表す場合に「場」と言えないのか。

（17）プールで（は）子供たちが泳いでいる。

また、「子供たち」は「参与者」ではないのか。「子供たち」という参与者が「プール」という「場」で泳いで、動いているという解釈が可能なので、当然これも「場－参与者」構文と言えそうである。そうだとしたら、「でーが」と「にーが」とは何が違うか、「場」とは何かということについて当然検討されなければならないと思われる。

2) 「場」と位格は同じであるか。

「にーが」構文にある二格については、熊代は次のように主張している。まず、すべての二格は場である。次に、存在文などでは、二格は存在場所であり、適用文などでは、二格は適用領域であるとした。ひいては、適用文のような存在文から遠い文は全体として「ある命題がある適用領域に写像する」と解釈した。このような議論によって、抽象的なレベルでは、二格はすべて「場」とであると統一的に解釈することを可能にした。

しかし、一方、益岡（2000）、森山（2004）などの主

張では、意味役割の角度から、「にーが」構文の文頭に立つ二格は具体的か抽象的な位置を表すとし、特に森山（2004）では、文頭の二格は位格であるとした。だが、位置を表す位格と「場」とは同じであろうか。

（18）机の上に花瓶がある。

このような典型的な存在文では文頭の二格が位格で、場と言えることはだれでも認めるだろう。

（19）私に日本語が話せる（こと）。

このような場合は、「日本語を話す」能力は「私」という抽象的な場にあると認められる。しかし、次の例文はどうだろう。

（20）私に（は）、これがうれしい。

この例文は「これがうれしい」という気持ちが「私」という抽象的な場に存在するというように理解してもよければ、「私にとって、これがうれしい」と理解してもいい。ところが、後者のほうは二格が「にとって」と置き換えられ、方向性のついたものなので、与格であるとも考えることも可能である。

（21）勉強に（は）時間が必要である。

この例文の二格も「にとって」と置き換えられて、与格と考えられる可能性が高い。しかも、この文は「場－参与者」構文よりも、「参与者－参与者」構文であると考えられやすい。

また、例（18）～例（21）を比較してみると、後のものになるほど、文頭に立つ二格が存在位置を表す場であると認められにくくなる。

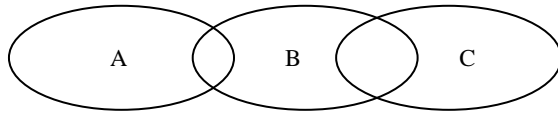
文頭の二格がすべて「存在位置」を表す位格であるという解釈が通じるなら、理想的な結果になるが、ここでは、そういう解釈には意味的に通じにくい部分があると言わざるをえない。これは「にーが」構文の研究における重要な課題である。

ところで、文の意味役割は長期間の変遷プロセスを経て、徐々に変わってきて、最後に今のネットワークを形成するものである。最初の意味は最後のモノと必ずしも一致していないから、意味役割の次元では無理をして統一的に解釈する必要がないと考えられる。そこで、二格の問題を解決するためには、家族的類似性の原理の導入が有効である。

#### 4.3 家族的類似性と「にーが」構文

Wittgenstein（1953）では、あるカテゴリーや概念の構成要素は、少しずつ重なり合うように類似し、相互に関連しあって構成しているが、すべて共通点を持っているわけではないことを提唱した（辻 2002 から再引用）。これはちょうど家族メンバーが似ているさと似ている。家族のメンバーはそれぞれ似ているかもしれないが、メンバー全員に共通する属性があるわけでは

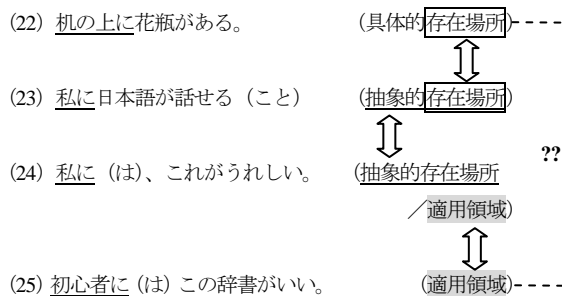
ない。以下では、極端な例を挙げて説明する。例えば、ある家族に A、B、C の三人がいるとする。A と B の間に共通性があり、B と C の間にも共通性があるが、A と C の間には共通性がない。

図 2<sup>2</sup>

この家族的類似性は認知言語学の理論的基礎になって、とくに語彙研究で広く使われてきた。この理論から、二格の問題はかなり解釈が容易になると考えられる。

## 4.4

節で挙げた例文で説明しよう。

図 3<sup>3</sup>

上の四つの例文で示したように、意味役割の角度から見ると、例 (22) と例 (23)、例 (23) と例 (24)、例 (24) と例 (25) の間の二格にはそれぞれ共通性があり、繋がっているが、例 (22) と例 (25) には共通性がなく、両者は直接に繋がっていない。実は家族類似性の角度から見れば、「にーが」構文の二格というカテゴリーでは、具体的な共通性が探し出せないのは何の不思議もないことである。

つまり、抽象的な次元で二格のスキーマをまとめることは可能であるが、具体的意味役割の次元では、二格を統一的に解釈することには無理があり、適切ではない。もし、文頭に立つ二格が位格であると主張したければ、位格が存在位置ではなくて、他の抽象的な定義が必要であると考えられる。

一方、家族的類似性の角度から見ることにより、ガ格の問題も理解しやすくなった。時枝以来、「にーが」構文におけるガ格を対象語として扱う学説が圧倒的に多い。具体的に言うと、例 (26) と例 (27) における属性の持ち主「地球」、または動作主「太郎」は典型的

な主語と認められている。それに対して、「この社会」、「あの人」が主語とされずに、対象語とされている。

(26) 地球はまるい。

(27) 太郎は走っている。

(28) 代助に(は)この社会が全然暗黒に見えた。

(30) 僕に(は)あの人がとてもこわい。

尾上 (近刊) が認めているように、自発文、可能文におけるガ格は確かに主語らしくない。即ち、同じガ格でも、主語性の度合いが違うわけである。家族的類似性から考えると、主語らしくないガ格が存在するのは当然であり、対象語という概念をたてずにすむことになるが、この点を証明するにはさらに詳しい検討が必要である。

以上をまとめると、家族的類似性の原理から見ると、「にーが」構文のような多様な意味構造における二格とガ格を分析するには、次のような注意が必要である。つまり、すべてのものを具体的な次元で簡単に一括して解釈してはいけない。また、個別性を認めたうえで、抽象的なスキーマをまとめることも大事である。即ち、それぞれの意味構造の特徴を分析し、お互いの関係を整理し、その上で、内部関連性を見つけて、構文に共通するスキーマを探ることが重要であると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

以下に本研究のまとめと今後の課題について述べる。

まず、益岡 (2000) で主張されているように、「にーが」動詞文は普通の動作文とは異なる。「にーが」動詞文はプロセス的事柄を描くのではなくて、状態か、自然発生的事柄を表す。次に、「にーが」構文の文頭に立つ二格は位置を表す位格と緊密にかかわっているが、文頭に立つ二格がすべて存在位置を表すわけではない。また、すべて位格であるとも言いきくい。もし、文頭の二格がすべて位格であると主張したければ、そうするためには、位格についての再定義が必要である。それから、「にーが」構文の二格は単なる補足成分であることもあれば、必須成分であることもある。最後に、ガ格は通常典型的な主語を表すが、主語性にも度合いの差がある。

「にーが」構文の研究には膨大な課題が残されている。それらは主に次の二つのものにまとめられる。まず、「にーが」構文は抽象的なレベルから言えば、「場一参与者」構文であるが、具体的な意味役割からそれぞれの二次的構文はお互いにかかわっているか、また、この構文はなぜ多様な意味構造を持ちえるのかについて研究をする必要がある。次に、二格には多様な意味

用法があり、ガ格にも主語性の問題があり、どちらも明らかにされなければならない。今後は項構造理論を念頭においた上で、それぞれの格項目の共通性と意味役割の個別性について研究を展開していきたいと思う。

#### 謝辞

本研究を執筆するにあたり、たくさんの有益なご助言をくださった佐々木泰子先生、森山新先生に衷心より感謝の意を申し上げます。

#### 注

1. 本稿が採用した例文はすべて参考文献からの引用である。
2. この図は筆者の作図である。
3. この図は筆者の作図である。

#### 主な参考文献

- 尾上圭介（近刊）『文法と意味2』くろしお出版  
久野すすむ（1973）『日本文法研究』大修館書店  
熊代敏行（2002）「日本語の「にーが」構文と分裂主語性」西村義樹編『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会  
柴谷方良（2001）「日本語の非規範的構文について」『言語学と日本語教育Ⅱ』南雅彦・アラム佐々木幸子共編  
辻幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社  
中右実・西村義樹（1998）『構文と事象構造』研究社  
益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版  
森山新（2004）「認知主体の把握の仕方と格助詞ニの多義構造について — 認知言語学的観点から —」『日本学報』59  
Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive grammar*, Stanford.

ちょう よう／北京日本学研究センター博士課程、お茶の水女子大学大学院・清華大学外国語学部講師  
zhaorong\_jp@yahoo.co.jp